



Title	上博楚簡『靈王遂申』の文献的性格
Author(s)	福田, 一也
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 84-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/58681">https://doi.org/10.18910/58681</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 上博楚簡『靈王遂申』の文献的性格

福田 一也

### 序言


二〇一二年十二月に刊行された馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（九）』（上海古籍出版社）には、『成王為城濮之行』・『靈王遂申』・『陳公治兵』・『拳治王天下』・『邦人不称』・『史薈問於夫子』・『卜書』と題された七つの文献が収録されている。この中の『靈王遂申』は、楚の靈王期（在位前五四〇年～前五二九年）の物語で、靈王十年（前五三一年）に蔡を滅ぼした際の状況が描かれている。上博楚簡中には楚王に関する説話が多く含まれており、靈王関連の説話は『申公臣靈王』に続いて二篇目となる。

本稿では、本篇に対する一通りの釈読を行った後、

『左伝』などの史料をもとに当時の時代背景を概観する。とりわけ楚と申との関係に着目し、その関係を明らかにした上で、『靈王遂申』の文献的性格について考えてみることにしたい。

### 一、書誌情報

整理者は、陳佩芬氏。その「説明」を参考に、『靈王遂申』の書誌情報について記しておく。篇名の「靈王遂申」（靈王、申を遂<sup>ほろ</sup>ぼす）は、文中の「王將述（遂）邦」（王將に邦を遂<sup>ほろ</sup>ぼす）の語などを参考に整理者が命名した仮題である。全五簡。残欠簡はなく、すべて完簡である。竹簡の上下は平斉で、両道編綫、右契口。簡長は三・三cmで、上端から第一契口までは九・五cm、第一契

口から第二契口までは1.5cm。第二契口から下端までは八・八cm。各簡の字数は二九字～三六字と一定せず、総字数は一六七字（合文三字）を存する。第五簡の末尾には、墨鉤（) が付されており、本篇の終わりを示している。なお、本篇は五簡ともに完簡であり、内容も連続していることから、整理者の排列に対する疑義は提出されていない。

## 二、『靈王遂申』 釈読

整理者の釈文と諸家の見解（本節末尾の【参考文献】参照）を参考に、筆者が確定した釈文を示し、併せて書き下し文・現代語訳を付す。

### 【釈文】

靈王既立、申賽（息）不懟。王敗蔡靈侯於呂、命申人室出、取蔡之器。執事人夾蔡人之軍門、命人母煩（髮）、命之遣。虎晶（三）徒出、執事人志（止之）。虎乘一輦（輦車）駟、告執事【2】人、  
「父（小人）學（幼）、不能以它器。得此車、或不能駢（御）之以歸。命以其策歸。」執事人許之。虎秉策以歸、【3】至重蒞、或棄其策安（焉）。成公懼

其又取安（焉）、而（逆）之（京）、爲之怒。「舉邦盡獲、女（汝）獨亡【4】得。」虎不答。或爲之怒。虎答曰、「君爲王臣、王將述（遂）邦弗能止、而或欲得安（焉）。」成公與虎歸、爲（裕）。  
■【5】

### 【書き下し文】

靈王既に立ち、申・息懟はず。王は蔡の靈侯を呂に敗り、申人をして室出して蔡の器を取らしむ。執事人は蔡人の軍門に夾み、人をして敢えて徒出すること母からしむ。申の成公濤、其の子虎は未だ髪を蓄えざるに、之をして遣らしむ。虎は三たび徒出し、執事人之を止む。虎は一輦車駟に乗り、執事人に告ぐるに、「小人幼くして、它器を以うること能わず。此の車を得るも、或た之を御して以て歸ること能わず。其の策を以て歸らしめよ」と。執事人之を許す。虎は策を乗りて以て歸るも、重蒞に至りて、或た其の策を棄つ。成公は其の又た取らんことを懼れ、之を京に逆えて、之が怒を爲す。「邦を擧げて盡く獲るも、汝獨り得るもの亡し」と。虎は答えず。或た之が怒を爲す。虎答えて曰く、「君は王臣爲るも、王將に邦を遂さんとして止むこと能わざ

れば、而ち<sup>すなわ</sup>或<sup>ま</sup>た得るを欲せんや」と。成公は虎と歸りて、祿を爲す■。

### 【現代語訳】

靈王が即位したとき、申国や息国の人々は快く思わなかった。靈王は蔡の靈侯を呂で破り、申人総出で蔡の器物を搬出するよう命じた。（靈王の命を受けた）監察官が蔡人の軍門の両端に立ち、何も取らずに出て行くものがないよう監視した。申の成公澹には、未成年の虎という子がおり、これを派遣することにした。虎は三度も手ぶらで立ち去ろうとし、監察官はこれを制止した。そこで虎は（蔡の器物である）車に乗り込み、監察官に次のように告げた、「私は幼いので、これらの器物を用いることはできません。この車をいただいても、御して帰ることもままならないのです。どうかこの鞭を持ち帰ることで許していただけませんか」と。監察官はようやくそれを認めた。こうして虎は鞭を手にして帰るのだが、途中の重溼<sup>じゅうせ</sup>まで来たとき、その鞭を棄ててしまった。（この知らせを聞いた）成公は、再度器物を取りに行かされることを危惧し、京の地まで出向いて虎を叱りつけた。「申国をあげて器物

を持ち帰っているのに、お前一人、何も手にしていない」と。虎は何も答えなかった。成公はますます腹を立てた。そこで虎が口を開いた、「君は楚王の臣下であるとはいえ、王が次々と国を滅ぼして止まるところがなければ、それでも何かを獲たいとお思いでしょうか。（申自体が減ばされれば、物などどもらつても意味はありません）」と。成公は虎と帰国し、祿の祭祀を行った。

### 【語注】（※参照論文は、末尾の【参考文献】に記す）

・「靈王既立」：整理者が指摘する通り、「靈王」とは、楚の靈王（在位前五四〇年～前五二九年）を指し、下文の「蔡靈侯」との事件は、靈王十年（前五三一年）であることが『左伝』昭公十一年にみえる。整理者は、「既（即）立（位）」とし、即位の意とする。意味上は、確かに即位を表すと思われるが、そのまま「既立（既に立つ）」でも釈読可能なので、ここでは原字に基づいて読むことにする。

・「申賽（息）不懟」：整理者は「申賽（塞）」とする。曹方向は清華簡『繫年』を参考に、「賽」は「息」に読むべきと指摘する。申と息は、「其れ申息の

老を如何せん」(『左伝』僖公十七年の伝)など、しばしば「申息」と連称され、楚の県として登場する。したがって、ここでは曹説に従う。なお、「愁」は、ここでは「よろこぶ」の意。『左伝』文公三年に「両君之士未愁」(両君の士未だ愁よろこばず)と類例がみえる。

・「室出」：整理者は、居所より遠く出かける意とする。曹方向は、家や戸ごとに一人を派遣する意とし、下文の「舉邦盡獲(邦を舉げて盡く獲る)」と呼応するとする。以下では、申の成公も子の虎を派遣する場面があることから、曹説に従い、申の各家から一人を派遣する意とする。

・「執事人」：整理者が命令の執行を司る人とするのに従う。文脈上も、靈王の命を嚴格に執行するため派遣された監察官と考えられる。

・「夾蔡人之軍門」：整理者は「之」字を往くの意と解し、「軍門に之ゆく」と読む。曹方向は、執事人が「蔡人の軍門」の左右に立ち(「夾」)、監視することとする。本篇には、監視役の執事人が手ぶらで軍門を退出しようとする虎を三度も制止する場面がある。こうした文脈に合致する曹氏の解釈に従うこととする。

・「徒出」：整理者は歩いて出る意とし、曹方向は何も取らずに手ぶらで出てゆく意とする。ここでは、蔡の器物を搬出する命を受けた申人を監視する場面であり、下文において「徒出」しようとした虎は三度も役人に制止され、最後は仕方なく鞭を持ち帰ることとなる。したがって、手ぶらで出て行く意とする曹説が文脈上適切であろう。

・「申成公濇」：整理者は「藁」字、蘇建洲は「濇」字に隸定し、成公の名とする。曹方向は、「水」に従い「時」に従う字とした上で、「考える」と同類の意として「待」字と推測する。家興(「簡帛論壇」第12楼)は、「水」に従い「寔」の省略形に従う字として「質」に読むが、この一文の解釈については説明がない。高榮鴻は「濇」字か「寔」字の省略形とし、音通により「識」(知る)の意とする。清華大學讀書会是、「消」字とし、他動詞で「飾」字に読む。張崇礼(「簡帛論壇」第13楼)は、「濇」字とし、「時」の意とする。

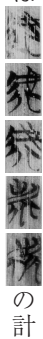
以上のように、この箇所については、成公の名とする解釈や動詞と捉える解釈、「時」の意とする解釈など議論紛々としている。いずれの解釈も通るが、注目すべきは上博楚簡『平王與王子木』

の以下の文章である。

競（景）平王、王子木に命じて城父に至らしむ。申を過ぎ、絳<sub>（景）</sub>莫<sub>（景）</sub>に煮食し、成公幹<sub>（景）</sub>舘<sub>（景）</sub>は疇中に跪く。

楚の平王の命で城父に向かった際、王子木は申の地で成公幹舘に出会う。申の地、及び「成公」という呼称が『靈王遂申』と共通することからも、両資料の「成公」は、非常に深い関係にあると推測される。『平王與王子木』と同工異曲の説話は、『説苑』辨物篇にみえ、ここでは「王子建出守於城父、與成公乾遇於疇中……（王子建出でて城父を守らんとするに、成公乾と疇中に遇い……）」と、やはり「成公」（名は「乾」）が登場する。平王は靈王の次の楚王であり、両資料は時代的に近接する。したがって、『靈王遂申』の「申成公」以下の一字も成公の名である可能性が高いであろう。ただし、「疇」と「幹」は字形が異なることから、同一人物ではないと考えられる。「申成公」については、本文で改めて考察する。

・「其子<sub>（其）</sub>」……整理者は「虚」字に隸定し、成公の子の名とする。成公の子の名であることは疑いないが、この文字は



六回登場する。清華大学読書会は、或るものは



「虎」に従い、或ものは「鹿」に従う字とした上で、「虚」字の可能性は少ないとし、『春秋』昭公十二年の経文との関連を指摘する。（『春秋』経文との関連については本論で説明。）「虚」字は「恒先」第一簡にも見えるが、下部の「丘」がこれと一致しない。「虎」字（『周易』第二五簡）や「鹿」字（『容成子』第四一簡）とも確かに近いが完全に一致するというほどではないようである。人名のため隸定は困難だが、便宜上の処置として「虎」字で表記しておく。なお、清華大学読書会は、『左伝』昭公十二年の経文にみえる「成熊」と「成虎」との関連を指摘している（本文参照）。

・「未畜（蓄）類（髪）」……整理者は、「未畜類」とする。「簡帛論壇」（第5楼）において、汗天山は「未畜（蓄）髪」（未だ髪を蓄えず）とし、まだ成長していない意とする。文脈上、最も通りが良いのでこの見解に従う。

・「志」……「志」字の下に合文符号「＝」があり、整理者は「止之」に読むべきとする。これに従う。  
・「輦＝」「輦」字の下に合文符号「＝」があり、整理者は「輦車」に読む。

・「矢」：「矢」字の下に合文符号「ニ」があり、整理者は「小人」に読むべきとする。これに従う。

・「而」 (逆) 之  (京) 「」：「而」 之 

について、整理者は「」を「述」字、「」を「亭」字に隸定する。曹方向は「述」字とした上で、「諄」字に読む可能性を指摘する。さらに、

「」については「京」字に隸定し、音通により「伴」字の意とする。(曹方向氏の釈文は、「而


諄之、京(伴)爲之怒」となっており、「而して之を諄ちかけて、伴いっわりて之が怒を爲す」と読んでいる

ようである。) 蘇建洲は、「述」字は『呉命』第四簡にもみえ、そこでは「逆」に解釈されていると

し、こども「逆」に釈読すべきとする。蘇氏が論ずるように、「述」字は『呉命』に用例がみえる

ことから、「逆」に釈読し、迎えるの意である可能性が高い。なぜなら、ここは任務を全うせず


に帰国しようとする虎を叱り飛ばす場面であり、成公はわざわざ虎のところまで出向いて行ったと

考えられるからである。「」は、曹氏が指摘するように、「京」字で解するべきであろうが、

音通で「伴」字の意とするのはやや飛躍した感がある。難解な箇所だが、文脈からは地名の可能性

が高いので、「之を京に逆むかえ」と読んでおく。

・「王將述(遂)邦」：整理者は、「述」と「遂」は通ずるとし、『説文』の「遂、亡也」を参考に、「遂邦」とは「亡国」(国を亡ぼす)ことであるとす。

・「爲」 (祿)：整理者は、「從示、格声、辞書未見」としながらも、上博楚簡『昭王毀室』の「室

既成、將之祿」などを参考に祭名とする。曹方向は、楚人に対する防備の意とするが、同時に「格」

「執拘」(とらえるの意)に読む可能性もあるとする。ただし、「小結」では「応有所戒備」として

おり、最終的には前者の防備の意で捉えている。後者も魅力的な解釈だが、「格」字は楚簡中

にはみえない点が難点である。「祿」字は上部が「各」、下部が「示」に作る字であり、示偏が付随

することや『昭王毀室』の用例からみるとやはり何らかの祭祀を指す可能性が高い。『昭王毀室』

では宮室の落成式を指すが、ここは建物との関係はないので落成式では通じない。この箇所は、成

公父子の帰国後の行動であるから、蔡国の二の舞とならぬよう国土の安泰を願うといった内容の祭

名と考えておく。

【参考文献】「簡帛網」(<http://www.bsm.org.cn/>)

・程燕「読『上博九』札記」(「簡帛網」二〇一三年一月六日)

・曹方向「上博九『靈王遂申』通釈」(「簡帛網」二〇一三年一月六日)

・蘇建洲「初読『上博九』劄記」(「簡帛網」二〇一三年一月六日)

・高佑仁「『上博九』初読」(「簡帛網」二〇一三年一月八日)

・高榮鴻「『上博九 靈王遂申』二号簡「澹」字試読」(「簡帛網」二〇一三年一月十日)

・清華大学出土文献読書会「『上博九・靈王遂申』研読」(清華大学出土文献与保護中心 [<http://www.tsinghua.edu.cn/publish/ceup/index.html>]) 二〇一三年三月二

九日) ※本文中では「清華大学読書会」と略称する。

・「簡帛論壇」・簡帛研読・「(靈王遂申)初読」(<http://www.bsm.org.cn/bbs/read.php?tid=3023>)

※これは「簡帛網」に設けられたコメント欄であり、『靈王遂申』についても様々にコメントが寄せられている。書き込み者はペンネームで記されることが多く、正式な学術論文としての体裁を備えていない。しかしながら、その中には貴重な見解もみえることか

ら、これを参照した場合には論文に準ずるものと見なし、その箇所を示すこととする。(例：「簡帛論壇」第〇楼」は、コメント欄第〇番目の意。)

### 三、楚と申

本篇は、楚の靈王が蔡を討った後、申人に「蔡之器」の搬出を命じたことが話の発端となっている。申は楚が中原へ進出する際の重要拠点であり、古くから楚と深い関係をもつ地域であった。そこで以下、内容の検討に先立ち、当該時期の楚と申との関係について考察を試みる。

申国と息国は、早くに楚に滅ばされて楚の県とされており、以後、しばしば「申息の師」と連称され、北方の大国晋と覇権を争った城濮の戦(前六三二年)では、楚軍の重要な一翼になっていた(注1)。楚が申を滅ぼした正確な年代は不明だが、『左伝』哀公十七年の伝に、楚の子穀が楚の文王期「在位?」前六七五年」の人材登用を賛美する中で、「彭仲爽は申の俘なるも、文王以て令尹と爲し、實に申息を縣とし、陳蔡を朝せしめ、汝に封畛す」と述べていることから、申・息が楚の県となったのは楚の文王の時と考えられる。県といえば、戦国の秦に代表されるように、本国より派遣された県令が管轄す



る王の直轄地といったイメージがあるが、春秋時代の県の支配形態は多様であり、楚が申を県とした際の状況についても様々な見方が存在する。増淵龍夫氏は申が県とされた際、それを新たに支配する県の多くは楚の王族出身者であったとし、旧申国の氏族秩序の中核をなす宗廟や公族は減ぼされたであろうとする<sup>(注2)</sup>。これに対して安倍道子氏は、旧申国の支配者やその継承者は殺害されたり他国へ出奔したりして存在しないが、その他の申の族人層にはあまり変化はなく、これらの社稷は減びてはいなかった可能性を指摘している<sup>(注3)</sup>。申が県とされた際、旧申国の族人層まで解体されたか否かについては見解が分かれるものの、申国が早い時期に楚の県となり、楚の公族たちが旧申国の君主に替わって統治したとする点では両者共通している。このように『左伝』などの伝世文献からは、楚の文王によって申が県とされて以降、申は独立した諸侯国としては存在していないことが知られる。したがって、本篇に登場する楚の靈王期の申も、諸侯国ではなく楚の県であり、「成公」とは、申県の管領者としての県公、或いは、それに準ずる地位の人物であるとの推論が成り立つ。

しかしながら、曹方向氏は、『靈王遂申』の「成公」は申県の県公ではないようだと疑念を提示する<sup>(注4)</sup>。

本篇の「成公」は諡号であり、よって県公ではないとするのである。さらに氏は、「申・息は愁<sup>しゅう</sup>ばず」という表現も、楚国の管轄下にある県としては不自然であり、「王將に邦を遂<sup>はは</sup>さんとして止むこと能わざれば」云々もまた、宗廟と社稷を保つ一国家のようだと述べる。『靈王遂申』をみる限りにおいては、曹氏の疑念ももっともであり、加えて「邦を擧げて盡く獲るも」といった表現も、申が独立した諸侯であるかのような印象を受ける。では一体、『靈王遂申』に登場する申とは、楚の県なのであるうか、それとも独立した諸侯国なのであるうか。

本篇中にみえる「申成公濞」については、残念ながら『左伝』などにこの人物を特定しうる記事を見出すことはできない<sup>(注5)</sup>。だが、「成公」という呼称との関連で注目されるのが、上博楚簡『平王與王子木』である。楚の平王期の物語を記したこの一篇は、平王の命で城父に赴く王子木（太子建）の様子を描いたもので、『左伝』昭公十九年（前五二三年）にも関連記事があり、靈王伐蔡（前五三一年）から僅か八年後の出来事である。

城父に赴く途中で申の地を通過した際、王子木は「成公幹<sup>かん</sup>𤇗」なる人物と出合い、問答を交わす。

競（景）平王、命王子木至城父。過<sup>へ</sup>申、煮食於<sup>於</sup>𤇗。成公幹<sup>かん</sup>𤇗跪<sup>くわい</sup>疇<sup>しゅう</sup>中。

競(景) 平王、王子木に命じて城父に至らしむ。申(を過ぎ、鉏臯に煮食し、成公幹魴は疇中に跪く。

ここで注目されるのは、『靈王遂申』と同じく、『平王與王子木』にも「成公」が登場する点である。また、「申を過ぎ」とあるように、成公と出会った場所が申地に関連する点も共通する。さらに、『靈王遂申』では、「君は王臣爲るも」と、父の成公を楚王の臣下とする発言がみえるが、『平王與王子木』においても成公は、「臣は將に告ぐること有らんとす」・「吾が先君莊王は」など、自身を楚王の臣下であるとしたり、楚の莊王を先君と呼ぶなどしている。「成公」という名称の一致、申地との関連、楚王の臣下という共通点、そして両文獻の対象とする時代が接近することなどから、両者は何らかの強い関連性をもつと考えられる。ただし、両者を同一人物と見做すには些か難点もある。まず両者の名が、「成公濤」(『靈王遂申』)と「成公幹魴」(『平王與王子木』)のように異なる点である(注6)。加えて、両者の人物描写にも大きな違いがみえる。『靈王遂申』の成公は、靈王の命に汲々とする頼りない父として描かれる。一方、『平王與王子木』の成公は、王子木の将来を予見する賢人として登場している。したがって、両者を同一人物と見做すことにはまだ慎重な検討が必要となるが、申地の

成公という共通点は、やはり両者の深い関連性を示すものとして注目される。

先述の如く、曹方向氏は、「成公」を諸侯の諡号と見做し、申を宗廟や社稷を保つ一国家のようだと指摘する。しかし、始めに示したように、『左伝』などの史料では、申国はすでに楚の文王期に楚の県となっており、その後も独立国として復興したという形跡は看取されない。よって、楚の靈王期の申は、やはり楚の県として存在したとみるべきであろう。ではなぜ、「成公」と記されているのであろうか。この問題については、清華大学読書会に示唆に富む指摘がある。

清華大学読書会は、「申成公」を楚靈王時の県公としたり、或いは「成」を諡号にもつ人物と考えたりするのは適切ではないとする。楚国における諡号は、往々にして封君に用いられ、県公には用いられないことがその理由である。そして、「申成公」とは、申地の成公であり、成得臣(令尹子玉)や成大心以下の成氏を指すとする。この考えに従い、「申成公」を申地の成氏一族と理解すれば、楚の文王期以降、申が楚の県として存在したという歴史的背景とも齟齬をきたすことはなくなる。また、楚王の臣下という表現とも整合性を保つことができよう。我々は、斉の桓公や晋の文公といった表現に慣れて

いるため、「○公」を諡号と捉えがちだが、以上のように考えれば、歴史記録との矛盾も解消されるのである。

ただし、清華大学読書会も既に指摘しているように、

「成公」を申の県公と考えるのは適切ではないと思われる。申の県公は、「申公巫臣」（莊王期）、「申公公子申」（共王期）のように表記されるのが通例であり、「申公」の間に「成」などの氏を挿入する例はみえないからである。また、靈王期の申公としては、『國語』楚語上に左史倚相と対話する申公子亹なる人物が存在し、靈王期にはこの申公子亹が申県の県公となっていたことが知られる。この説話の中で左史倚相は、楚の朝廷に出仕しない申公子亹を批判しているが、ここから申公子亹は、当時申県で直接統治を行っていたわけではなく、楚の朝廷に出仕するなど、楚国の中枢部にいたことがわかる。とすれば、彼の管轄する申県の実質的な統治は、申公子亹から委任された別の人物が行っていたことになる。『靈王遂申』に登場する「成公」、すなわち成氏は、この実質的な統治者であったのかも知れない。「君は王臣爲るも」という表現から推測するに、成公は申公ではないとしても、やはり申地の統治を担う人物であり、かつ「王臣」とあるように楚王・楚国との繋がりも深い人物だったと思われる。このあたりの事情は、資料的な制約もあり

判然としないが、成公は申県の統治に深く関わる人物であり、申公に準ずる地位にあった可能性は高いと考えられる。

さらに、もう一つ清華大学読書会は、興味深い指摘を行っている。それは、成氏と『左伝』昭公十二年の經文にみえる「成熊（或いは、「成虎」）」との関連である。

楚殺其大夫成熊。（楚は其の大夫成熊を殺す。）

經文に登場する楚の大夫「成熊」は、『公羊伝』では「成然」、「穀梁伝」では「成虎」、『左伝』伝文では「成虎」となっており、表記に揺れがみえる。清華大学読書会は、この中の「成虎」に着目し、成公の子を指す可能性を指摘する。この記事は、『靈王遂申』にみえる滅蔡の翌年の出来事であり、清華大学読書会はさらに踏み込んで、成虎は靈王の命に従わなかったために殺害されたのではないかとの推測を行っている。確かにこの記事は楚王と成氏との不仲を窺わせるに十分であり、上述の如く『靈王遂申』の「成公」が成氏であるならば、時期的な面からみても何らかの関連をもつことが予想される。しかしながら、『左伝』中の「大夫成熊（或いは「成虎」）」を成公の子に比定することは些か難点がある。本文中に六回登場する成公の子の名は、「虎」字とも「鹿」字とも隸定可能な文字なので、字形的には十分に可能性

はある。ただし、「未だ髪を蓄えざるに」とあるように、成公の子はまだ幼い童子であり、大夫の地位にあったとは考えにくい。たとえ靈王に殺害されたとしても、『春秋』の経文に特記されることはなかったであろう。

もっとも、『靈王遂申』は、歴史記録そのものではなく、歴史を基にした説話的要素を含む文献なので、物語展開に合わせて登場人物の設定を幾らか変更している可能性はある。後述の如く、主人公の虎が童子として登場することには、一定の意味があると思われるからである。したがって、依然として両者が同一人物である可能性も残るものの、ここでは『左伝』の「成熊」が、『靈王遂申』の成公父子などと同じ成氏一族である可能性を示すにとどめておく。

以上の考察により、『靈王遂申』にみえる申とは楚の県であり、成公とは実質的に申県の統治に関わる成氏ではないかとの推論を得たが、それでもなお未解決の問題が残る。それは、曹方向氏が指摘していたように、本篇中の申は一つの国家のようにみえる点である。

これについては、『左伝』宣公十一年にみえる楚の莊王が陳を滅ぼした際の「諸侯・県公皆な慶す」などの記載が参考になる。増淵氏はここで諸侯とともに県公が併記されていることに着目し、当時、楚の県公は諸侯に迫

るほどの強大な権力をもっていたと指摘する<sup>〔注7〕</sup>。このほか、楚の靈王が蔡を滅ぼしたとき、弟を蔡の県公に任命して蔡県を管領させるが、蔡公は後に蔡県の軍勢を率いて反旗を翻し、靈王を殺して王（平王）となっていく。これも楚県の力の強大さを示す好例といえよう。すなわち、申は楚の県ではあるものの、諸侯国にも匹敵する力を備えていた（或いは、ほぼ同等と考えられていた）。故に、一国の如く表現されているものと思われる。

#### 四、本篇の中心的立場

曹方向氏は、本篇の内容を次のように総括している。

本篇整個故事和靈王没有多大關係。講的是楚滅蔡、

命申人去蔡人那里繳獲器物<sup>〔注8〕</sup>。

（本篇の物語全体は、靈王とあまり大きな関係はない。語られるのは、楚が蔡を滅ぼし、申人に蔡人のところへ行つて器物を取るよう命じたことである。）

曹氏は、本篇と楚の靈王はあまり関係がないとする。これは冒頭部にみえる靈王即位時の状況、及びそれに続く伐蔡の記事を除き、本篇中に靈王の直接の発言や行動などがみえないためであろう。中心となる舞台は器物の搬出を命じられた申であり、成公父子の中でも、とりわ

け子の虎を主人公として物語は展開する。すでに公開された上博楚簡中にも楚国関連の説話は多く含まれているが、そこでは主として楚王が物語の中心的役割を担っていた。例えば、同じく楚の靈王関連の物語である『申公臣靈王』では、楚の靈王と臣下の陳公（穿封戌）の君臣問答となっており、また他の楚国の説話も、楚王の言動が話題の中心となることが多く（注9）、それらと比較すると本篇はやや異質な感じを受ける。靈王と関連が薄いとされる曹氏の見解も、多分にこれまでの楚国関連の文献との比較の上で述べたものであろう。

確かに、本篇中には楚王自身の発言はみえず、成公父子の言動が大半を占める。分量的には、申を中心とするようにもみえるが、この点はどのように考えるべきであろうか。

まず本篇冒頭では、靈王の即位時の状況が語られる。「靈王既に立ちて、申・息懋（よもぎ）ばず」と、申や息は靈王の即位を歓迎しなかったという。具体的な理由は明示されないが、それは靈王の素行の悪さに起因すると思われる。靈王は共王の次男で、兄康王の息子である郟敖の時に令尹となる。（『左伝』襄公二十九年）。しかし、軍事演習の際に王の旗旗を勝手に作成して使用したり（『左伝』昭公七年）、號の会合で楚王と見紛うばかりの装いで登場

するなど（『左伝』昭公元年）、僭越な振る舞いが絶えない。そしてその即位もかなり強引である。鄭への聘問の途にあった公子圉（靈王）は、王が病と聞くやすぐに帰国し、見舞いと称して王を絞殺。王の二子をも殺害して王位に就く（『左伝』昭公元年）。申・息が靈王の即位を快く思わないのも、こうした事情を踏まえてのことであろう。さらに「申息懋（よもぎ）ばず」という一文は、申が災いに見舞われることへの伏線ともなっており、果たして申人は、靈王の命で強制的に器物の搬出に駆り出されることになる。

楚や楚王に直接関連する部分はここまでで、以下は成公父子の言動が物語の中心となる。楚の靈王は登場せず、物語の舞台も滅ばされた蔡地や成公父子の申地が主となる。だが、ここで留意すべきは、このような状況を生み出した張本人は、楚の靈王その人であるという点である。成公父子の行動は、靈王の命令に起因するのであり、とくに成公の言動は常に靈王を意識したものとなっている。靈王は表だって登場こそしないが、その背後に常に存在しているのである。

さらに、楚に滅ばされた蔡はもとより、前節で検討した如く、申もこの時期は楚の県として存在する。舞台は蔡や申であるとしても、それは楚国の版図内の出来事で

あり、本篇は大きく見ればやはり楚国の記録の一つであるといえる。そしてそのことは、本篇冒頭の表記にも現れている。冒頭には「靈王既に立ち」と、単に「靈王」と記されるのみで、楚王であることは明示されない。楚の靈王であることは自明のため、わざわざ記さなかったのであろう。一方で、成公や蔡侯の場合、「申成公」・「蔡靈侯」と申や蔡が特記されている。仮に本篇が申を中心に描かれたならば、少なくとも冒頭の靈王に関して省略せず、「楚靈王」と表記したはずである。

こうした表記上の特徴は、『靈王遂申』のみならず、上博楚簡中の歴史説話に一定程度共通してみえる。

- ① 「魯邦大旱。哀公謂孔子」（『魯邦大旱』）
- ② 「齊競（景）公○且虐」（『競公虐』）
- ③ 「苦成家父事厲公為士憲」（『姑成家父』）
- ④ 「莊王既成無射、以問沈尹子楨」（『莊王既成』）
- ⑤ 「鄭子家喪、邊人來告。莊王就大夫而與之言曰」（『鄭子家喪』）
- ⑥ 「禦於棘遂、陳公子皇囚皇子。王子圉奪之、陳公爭之」（『申公臣靈王』）
- ⑦ 「知■競（景）平王命王子木」（『平王与王子木』）
- ⑧ 「競（景）平王就鄭壽」（『平王問鄭壽』）
- ⑨ 「昭王爲室於死滑之澮」（『昭王毀室』）

⑩ 「昭王蹠逃瑤」（『昭王与龔之脾』）

⑪ 「范叟曰。王乃出而見之」（『君人者何必安哉』）

⑫ 「東（簡）大王泊旱」（『東大王泊旱』）

①は魯、②は齊、③は晋の物語であり、齊については「齊競（景）公」のように国名と君名が併記されるが、①と③では、「哀公」・「厲公」のように国名は記されていない。④～⑫は全て楚に関するものであるが、これも君名が記されるのみで、「楚」であることは明示されていない（ただし、⑥に関しては即位前の出来事であるため、冒頭には「靈王」ではなく「王子圉」と記されている）。おそらく②を除く各篇の著者は、国名まで記さずとも読者には明白のことであると考え、これを省略したのであろう。④以下の楚国関連の文献には特にその傾向が強く、「莊王」・「平王」・「昭王」「簡大王」のように、君名のみが記されている。上博楚簡は楚との関連が指摘されているが<sup>（注10）</sup>、④～⑫の楚国関係の文献は、こうした記述上の特徴からも楚を中心とする立場から作成された可能性が高い。そして、「靈王既立」という書き出しで始まる本篇も、やはり楚に重点を置く立場から記されたと考えられる。



## 五、本篇の内容、及びその文献的性格

以上を踏まえ、本物語の内容について分析を試みよう。靈王は蔡を破った後、申人に「蔡之器」を持ち去るよう命ずる。「蔡之器」とは、蔡国の国政を司る祭器などの礼器を指すと考えられる。これらを残らず搬出させるということは、蔡を完全に滅ぼすことにはかならない。この時の経緯を『左伝』昭公十一年の伝は次のように記す。

楚子申に在り。蔡の靈侯を召す。靈侯將に往かんとす。蔡の大夫曰く、「王は貪りて信無く、唯だ蔡を感む。今、幣重く言甘くして、我を誘うなり。往くこと無きに如かず」と。蔡侯可とせず。三月丙申、楚子は甲を伏せて蔡侯を申に饗し、酔わせて之を執る。夏、四月丁巳、之を殺し、其の士七十人を刑す。公子棄疾、師を帥いて蔡を圍む。（中略）冬、十一月、楚子、蔡を滅ぼし、隱大子を岡山に用う。申無字曰く、「不詳なり。五牲も相爲に用いざるに、況んや諸侯を用うるをや。王は必ず之を悔いん」と。楚の靈王は申に滞在し、蔡の靈侯を招いた。招請に応じようとする蔡の靈侯を、蔡の大夫たちは制止する。靈

王は貪欲で信頼できず、蔡を恨んでいる。にもかかわらず、金品や甘言で我が君を誘うのは、必ずや靈王の罠であるというのである。だが、靈侯は大夫らの意見を退けて申に往き、宴席で酔ったところを従者七十人とともに殺害される。この機に乗じて靈王は、弟の棄疾に命じて蔡を包囲させ、半年後に蔡を滅ぼす。そして「隱大子を岡山に用う」とあるように、捕らえた蔡君の世継をも殺して祭祀の犠牲とし、蔡国はここに一旦滅亡を余儀なくされるのである。こうした『左伝』の「蔡を滅ぼす」という記述と、『靈王遂申』の祭器搬出の記載はまさに符合する。そして命を受けた申人は、靈王への強い恐怖心を抱くことになったであろう。蔡の礼器をことごとく撤去して蔡国を完全に滅ぼすと同時に、これを見せしめとして申に圧力をかけることが、靈王の真の狙いであったと思われる。

命を受けた申の成公は、かなり慎重な態度をとっており、そこからは靈王に対する強い不信任感が読み取れる。靈王の命令に対し、成公は自身で出向くことはせず、まだ幼い虎を派遣する。上述の如く、靈王は巧みに蔡侯を誘い出して殺害し、その世継も殺している。蔡の大夫たちが「王は貪りて信無く」と評していたように、靈王の無道ぶりはつとに有名であった。もし、自分や太子が蔡

の地で靈王の奸計にあえば、申も蔡国の二の舞となることは容易に想像できる。とはいえ靈王の命に背けば、今度はそこにつけ込まれる恐れもある。こうしたジレンマの末に考案された苦肉の策が、幼い虎の派遣だったのであろう。各家から人員を派遣するという条件を満たし、且つ幼い虎ならば命まで取られる可能性は少ない。このような算段が申公にはたらいいたのではなからうか。

しかしながら、虎は蔡国の軍門で何も取らずに立ち去ろうとし、監視役の「執事人」に三度制止される。この「執事人」は、靈王の命を厳格に実行する靈王の代理人である。虎は、幼いことを理由に言い逃れようとするが、この幼い童子に対しても、「執事人」は決して容赦はしない。子どもにすら例外を認めず、厳しく命を施行しようとするのである。この「執事人」は靈王その人であり、全てを自分の意に従わせ、一切の妥協を許さない靈王の苛烈な政治を象徴するものとなっている。

そこで虎は、鞭を持ち帰ることで許しを請い、これは何とか認められるが、その鞭も帰る途中で棄ててしまう。成公は、帰路の途にあつた虎のところまで出向いて彼を叱り飛ばすが、これも後々の靈王の咎めを恐れていることと思われる。そうした弱腰の父に対して虎は、「たとえ楚王の臣下としてお仕えしても、（蔡国のように）

国自体を滅ぼされてしまえば、器物などもらったところで何の役に立つのか」と反論する。ここではじめて成公は、虎の行動が申国の将来を見通した上でのことだったことを知るのである。そして、帰国した成公父子は、将来の安寧を祈願する。彼らにできるのは、ただ祈ることだけだったのである。

本篇は、成公父子を中心に物語が展開する。とりわけ虎は、物語の鍵となる人物であり、本篇の主人公であるといえる。最後の場面では、虎の不可解な行動の理由が明らかとなり、意外にも幼い虎が実は申の未来をよく見通していたという点に説話としての面白味がある。しかしながら、虎の顕彰そのものが本篇の目的であったとは考えにくい。なぜなら、虎の行為によって何か問題が解決したわけではないからである。父の成公も、蔡の器物を欲してはおらず、これが申に対する威嚇であり、以後、申にも危険が及ぶであろうことは重々承知していた。故に自身は出向かず、幼い虎を派遣したものである。

とすれば、本篇における虎の役割は、もっと別のところに求められるであろう。虎は幼い童子という設定で登場するが、その役割は以下の二点にあると思われる。

一点目は、靈王の無慈悲さを強調する役割である。先



述の如く、厳格な「執事人」の姿は、靈王その人と重なる。童子さえも容赦しないことにより、その非情さは、より際立つことになる。虎が幼い童子であるとの設定は、靈王の厳格さを引き立たせる効果を有するといえる。

二点目は、靈王に対する批判者としての役割である。篇末部において虎は、「王將に邦を遂<sup>ほろ</sup>さんと<sup>ま</sup>して止む」と能わざれば而<sup>すなわ</sup>ち或<sup>ま</sup>た得るを欲せんや」と、靈王の無道さに対して批判的な言葉を口にする。父の成公は、靈王の命に汲々とするばかりで、靈王を直接批判することはない。だが虎は、その若さのゆえか、靈王の横暴に対して、率直な批判の言葉を述べるに至っている。成公もこれに同意しているところからみれば、虎と思いは同じだったのであろう。靈王の圧政に苦しむ父や申人の思いを代弁している点も、虎の重要な役割であったと考えられる。

確かに、本篇ではその大半が成公父子の言動に費やされている。だがそれは、靈王の苛烈な統治を、靈王の命に困惑する成公父子の姿を通して描き出すためであったと考えられるのである。

滅蔡の二年後、靈王に対して反乱が勃発し、靈王は悲惨な最期を遂げる。反乱軍の先頭に立ったのは、かつて靈王に国を亡ぼされた陳や蔡などの人々であった（『左

伝』昭公十三年）。靈王の一連の滅国政策、及び恐怖政治は、靈王自身をも滅ぼす結果となったのである。本篇は、そうした靈王の末路を暗示するかのようであり、興味深い。

先述の如く、本篇は楚を中心とする立場から作成されている。冒頭に靈王の事績を記すことから、楚の靈王期の統治の一端を伝えることを意図したのであろう。靈王は、確かに物語の前面には出ていない。しかしながら事の発端は靈王の命令にあるのであり、成公父子の言動を通して靈王の悪政を伝えることに本文献の主たる目的があったと考えられる。

## 注

- (1) 「楚の闕克・屈禦寇、申<sup>ウ</sup>息の師を以て商密を成る」（『左伝』僖公二五年）、や「大夫若し入らば、其れ申<sup>ウ</sup>息の老を如何せん」（『左伝』僖公二八年）のように、申と息はよく併称される。また、後者は楚王が城濮の戦いで敗北した子玉に対し、父兄に顔向けができないと語る場面だが、この記述から申や息の出身者の多くが城濮の戦いに兵士として参戦していたことがわかる。

- (2) 増淵龍夫「先秦時代の封建と郡県」（『中国古代の社会と国

家』、弘文堂、一九六〇年所収)

(3) 安倍道子「春秋楚国の申鼎・陳鼎・蔡鼎をめぐる」(『東海大学紀要・文学部』41、一九八四年)

(4) 曹方向氏前掲論文。

(5) 『国語』楚語上には、左史倚相と対話する申公子亹なる人物の問答がみえる。前後は楚の靈王の物語なので、子亹も靈王期の人物と考えられ、靈王期にはこの申公子亹が申鼎の鼎公となっていたことがわかる。

(6) 『平王與王子木』と同工異曲の説話が『說苑』辨物篇にも見える。そこでは「成公乾」となっており、「幹」或いは「乾」一字を名としていた可能性もあるが、やはり「澹」とは一致しない。

(7) 増淵龍夫氏前掲書。

(8) 曹方向氏前掲論文。

(9) 『莊王既成』・『平王與王子木』・『平王問鄭壽』・『東大王泊旱』・『君人者何必安哉』・『鄭子家喪』など、楚王関係の説話の多くは、いずれも楚王と臣下の問答を中心に物語が展開する。ただし、『命』(第八分冊所収)や『成王為城濮之行』(第九分冊所収)など、臣下同士の会話が主となっているものもある。

(10) 浅野裕一「新出土資料と諸子百家研究」(『中国研究集刊』別冊総第三十八号、二〇〇五年)、湯浅邦弘「教戒書としての

『君人者何必安哉』」(『竹簡が語る古代中国思想』(三)、汲古選書、二〇一年)などを参照。